様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０３０３８

研究課題名（和文）教育場面での規範逸脱行動を拡散する要因の検討および規範について考える授業案の開発

研究課題名（英文）Factors that spread rule-breaking behavior in educational settings and lesson plans focused on norms

研究代表者
出口　拓彦（DEGUCHI, Takuhiko）

奈良教育大学・学校教育講座・教授

研究者番号：９０３８２４６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　教育場面での規範逸脱行動を拡散させる要因を考察するための理論的・方法論的な枠組みの基盤が構築された。この枠組みを援用したコンピュータ・シミュレーションによって，集団や社会の成員が持つ社会的感受性の分布によって，規範逸脱行動拡散の要因（より広い範囲の人々の様子を考慮するか否か）の効果は異なることが示唆された。また，研究で得られた知見等を基に，「規範」について考えるための授業案が作成され，一定の教育的な効果を持つことが実証的に示された。さらに，「教員間いじめ」の被経験頻度や「いじめ」を目撃した際の報告頻度といった成人による問題行動の実態が，教員を対象とした３年間のＷＥＢ調査によって把握された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　授業内容とは関係の無い「私語」は，一般には「してはいけないこと」と考えられている。しかし実際には，多くの者たちによって私語はなされている。このような「してはいけないこと」ととらえられている行動が少なからぬ人々によって行われる過程について，本研究によって理論的に考えることができるようになった。そして，得られた知見を基に「規範について考える授業案」を作成することで，「規範逸脱行動について自分自身で理論的に考える」という実践的な力を養うための方法を提示することも可能となった。この他，いわゆる「教員間いじめ」の実態も把握された。このように，学術的・社会的双方の意義を有すると思われる成果が得られた。

研究成果の概要（英文）：Theoretical and methodological frameworks regarding the spread of rule-breaking behavior in educational settings were developed based on educational and social psychology theories. Results from the computer simulations using these frameworks suggested that the effects of the factor (specifically, whether to consider people who were not physically adjacent) on the spread of rule-breaking behaviors in a group or society might differ depending on the distribution of its members' critical numbers. In addition, based on current findings, lesson plans focused on thinking about norms were developed and their educational effects were empirically tested. Furthermore, information regarding adults' misbehaviors, for example, frequency of bullying among teachers and frequency of reporting when witnessing bullying, were gathered by a three-year online survey for schoolteachers.

研究分野：教育社会心理学

キーワード：教育心理学　社会心理学　規範逸脱行動　教室　学級　限界質量モデル　セル・オートマトン　シミュレーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様 式 Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 規範逸脱行動の現状

「授業中の私語」や「授業中の飲食」「不正行為」(Cheating)など，教育場面における規範逸脱行動を扱った研究は数多く（e.g. Durmuscelebi, 2010; Özben, 2010），特に「授業中の私語」は，小学校から四年制大学に至るまで，多様な校種を対象とした研究がなされている（e.g. 安藤他, 2013; 出口・吉田, 2005; 鈴木他, 2015）。そして，児童に関する「困難な事項」(例：暴言や暴力，悪ふざけやいたずら，等）のうち，授業中の私語は最も頻繁に経験され，教師に対するストレス強度も最も高かったことが報告されている（安藤他, 2013）。このように,「授業中の私語」といった身近な規範逸脱行動であっても，時として「暴力」という攻撃的な反社会的行動（e.g. Burt et al., 2015）に匹敵する否定的な影響を教師に及ぼしうることが知られている。

(2) 本研究における「問い」

教育場面における規範逸脱行動は，基本的には多くの者に「まずい」と否定的に（その行動を行うことを許容しない方向で）考えられていることが，従来から報告されている(e.g. 卜部・佐々木, 1996)。しかし実際には,「規範」から逸脱する行動は少なからず発生している（e.g. Durmuscelebi, 2010)。

「規範」に関連して，社会規範を「命令的規範」と「記述的規範」という２つの種類で考察した研究がある（Cialdini et al., 1990)。「命令的規範」とは,「多くの人々がとるべき行動や，望ましい行動と評価するであろうとの，個人の知覚に基づく規範」（北折, 2006）であり，個々人によって「○○は悪いことだ」と考えられるものである（北折, 2006)。一方の「記述的規範」とは,「(周囲にいる）多くの人々がしている行動」(Cialdini et al., 1990）のことであり,「『何が典型的で普通なのか』を示す」(p.1015)ものとされている。つまり，逸脱行動をしている他者は，周囲に対して「ここでは規範逸脱行動をすることは『普通』である」というメッセージを発していることになる。そして，人々は,（自らの規範ではなく）他者によって発信された「規範逸脱的なメッセージ」，すなわち,「規範逸脱行動を肯定する記述的規範」に従って，規範から逸脱している可能性が考えられる。

ここから,「なぜ，多くの個人は規範逸脱行動を『してはいけない』と考えているにもかかわらず，集団においては『規範からの逸脱を許容・肯定する記述的規範』が成立し，多数の人々が規範逸脱行動をするに至るのか？」という問いが生じてくる。これが，本研究を開始した際の学術的な背景である。

２．研究の目的

教室や大学の構内など，多数の他者が存在する集団における教育場面での規範逸脱行動に主として着目し,「多くの人が規範逸脱行動を否定的にとらえているにもかかわらず，なぜ，集団での規範逸脱行動が広がり（拡散し）うるのか」「規範逸脱行動の拡散・不拡散を決定する要因は何か」という問題について検討することを目的とした。さらに，得られた知見を基に，規範逸脱行動抑制のための授業案の作成も試みた。

これまでの研究では，個々人が持つ規範意識は「○○という行動を，どのように思うか」といった質問に対して「良いと思う」「悪いと思う」などの回答を求めて測定されることが多かった（e.g. Stewart, 2003; 卜部・佐々木, 1996)。これに対して本研究では，ゲーム理論（e.g. Axelrod, 1997; 生天目, 2004）や相互依存理論（e.g. Kelly et al., 2003; Thibaut & Kelley, 1959）を基にした「決定行列」(e.g. Deguchi, 2014)を使用して,「自分の周囲にいる他者」にも着目しつつ，規範逸脱行動に対する態度を測定する方法（出口, 2018）も用いることとした。

「決定行列」とは,「自分と他者が持つ（行動等に関する）選択肢の組み合わせで定められる利得（満足度など）を示したもの」（出口, 2018）のことである。例えば，自分と他者のそれぞれが，規範を「守る(Obeying)」「破る(Breaking)」という２つの選択肢を持つとき，お互いの利得（満足度など）は表１のように表現することができる。M12 は「『自分は規範を守っているにもかかわらず，周囲は破っている状況』に対する満足度」を表す。もしも「M11, M12, M21, M22」の値が順に「5, 3, 3, 5」であったとしたら，他者が「Obeying」の場合は自分も「Obeying」 を選択した方が満足度は高く，他者が「Breaking」の場合は自分も「Breaking」を選択した方が高いことになり,「同調」に分類される。

この方法で分類された「態度」は「行動基準」と呼ばれている（e.g. 出口, 2018)。中学生が持つ行動基準を測定した研究（出口, 2018）では,「遵守」的な行動基準を持つ者は全体の３分の１弱しかいなかった一方で,「同調」的な（行動基準を持った）者は約半数を占めていたことが報告されている。このような状況では，一部の者たちによる規範逸脱行動が，連鎖反応的に周囲（教室内）に拡散しうると考えられる。

表1 規範逸脱行動に関する決定行列

	相手の状態	
自分の状態	Obeying	Breaking
Obeying	M11	M12
Breaking	M21	M22

※Deguchi (2014)を基に作成。

以上のように，本研究では，教育場面で規範逸脱行動が発生する過程について，①個々人が持つ「行動基準」

と，②個々人が行動基準に基づいて行動することで生じる「相互作用」が集団に及ぼす影響，に着目して検討することを目的とした。そして，「集団における規範逸脱行動の拡散・不拡散を規定する条件」の特定を目指した。

３．研究の方法

多数の個人が互いに影響を及ぼし合い，集団全体の様相が変化していく過程については，ダイナミック社会的インパクト理論（Dynamic Social Impact Theory，DSIT; e.g. Latané et al.，1994）を援用して検討した。まず，決定行列を構成する M11 から M22 の 4 つの値を質問紙によって測定した。次に，測定したデータをコンピュータに入力し，DSIT を基にしたシミュレーション（Deguchi，2014）を実施した。具体的には，コンピュータ上のマトリクス（「教室」等を表す）に多数の「セル」（「生徒」等を表す）を配置して，隣接したセルとの相互作用などによって各セルの状態（規範を守っている(Obeying)か，破っている(Breaking)か）を変容させた。

例えば，「同調」の行動基準を入力されたセルは，自分の周囲にあるセル（例：上下左右＋斜めの 8 セル）のうち，Obeying 状態のセルが多ければ自らも Obeying 状態になり，逆に Breaking 状態のセルが多ければ Breaking 状態になる。「逸脱」（の行動基準を入力された）セルは，周囲のセルにかかわらず Breaking 状態になる。もしも，多数の「同調」セルの中に複数の「逸脱」セルが集まっている場合は，まず，「逸脱」セルに隣接する「同調」セルが Breaking 状態になり，その後，その周囲に位置する「同調」セルが連鎖反応的に Breaking 状態に変化し，結果的に大部分のセルが Breaking 状態になる可能性がある。この時，常に規範を守ろうとする「遵守」セルもマトリクス上に存在する場合は，「逸脱」セルとの影響力の競り合いが生じることになる。

そして，集団を構成する成員の「行動基準」の種類や空間的な位置関係（例：「その教室はどのような行動基準を持った生徒で構成され，各生徒はどの座席に座っているのか」）といった事柄と，シミュレーションの出力（逸脱頻度）との関連を分析することで，規範逸脱行動の拡散・不拡散の規定因を特定することを試みた（出口，2020a，2021b）。また，質問紙によって実際の「逸脱頻度」（実測値）も併せて測定し，シミュレーションの出力（予測値）との関連を分析することで，理論モデルの妥当性検討も行った（出口，2021b）。

さらに，本研究によって得られた研究結果等を基にして「規範について考える授業案」を作成し，その効果測定も行った（出口，2019，2022）。前述のコンピュータ・シミュレーションを行うプログラムは規範逸脱行動の拡散過程を可視化することができるため，授業の際は，これを教材として使用した。

４．研究成果

(1) 規範逸脱行動を拡散する要因に関する理論的研究

まず，中学生を対象とした質問紙調査で得られた「社会的感受性」と「座席位置（物理的な位置関係）」「ある行動の頻度」に関するデータを基に，コンピュータ上に生徒間の位置関係を再現した教室（図１）を作成した（出口，2021b）。そして，「限界質量モデル」(e.g. Schelling，2006; 高木，2005，2006)を基にしたシミュレーションを実施し，「シミュレーションの出力」と「質問紙による実測値」を比較した。その結果，両者の間には，中程度以上の相関係数（積率相関係数）が示された。このことから，本研究で使用している規範逸脱行動の拡散に関するモデルは，現実のプロセスを説明しうるものであることが示唆された。

さらに，このシミュレーションのモデルを援用して，「ある行動」に対して個人が持つ態度が，その集団や社会におけるその行動の採用率に及ぼす影響についても検討した（出口，2020a）。その結果，個々人が知覚できる範囲に「限界」ないし制限を持たせたモデルである「ローカル条件」の方が，このような制限を持たせない「グローバル条件」に比べて，行動変容が起こりにくい傾向が示された。しかし，社会的感受性（「ある行動」の採用のしやすさを表す）が正規分布するときは，「ローカル条件」の方が行動変容は生じやすくなる可能性があることも見いだされた。つまり，社会的感受性が低い者，中程度な者，高い者が同じ程度の割合でいる集団（学校の「教室」等）や社会においては（社会的感受性が「一様分布」である場合は），（自分の周囲にいる者だけでなく）より遠くにいる者の行動についても考慮した方が（「グローバル条件」の方が），少

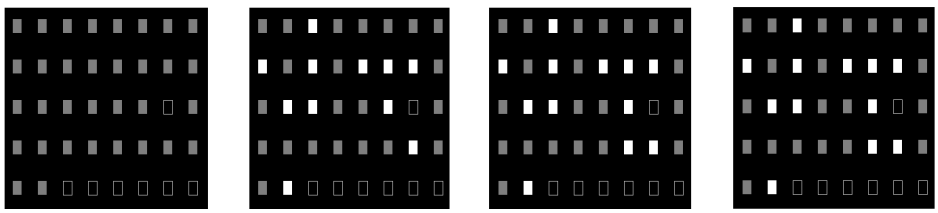

図1 教室における生徒同士の位置関係を再現したシミュレーションの一例（出口，2021b）

※図の上が教卓側。明るい点はBreaking状態，暗い点はObeying状態。
（「枠のみ」の部分はセルは存在しない。）
※数値はステップ数を表す。第3ステップで収束。
※使用したデータは収集したデータをランダムに合成したもの（実在する学級ではない）。

数派による規範逸脱行動は集団や社会全体に広がりやすくなる可能性が見られた。一方，社会的感受性が中程度な者は比較的多く，低い者や高い者は相対的に少ない集団や社会においては（社会的感受性が「正規分布」である場合は），自分の周囲にいる者の行動のみについて考慮した方が（「ローカル条件」の方が），（少数派による規範逸脱行動は）全体に広がりやすくなる傾向が示唆された。このように，その集団における社会的感受性の分布によって，規範逸脱行動を拡散させる要因（より広い範囲の人々の様子を考慮するか否か）の効果は異なる可能性があることが示された。

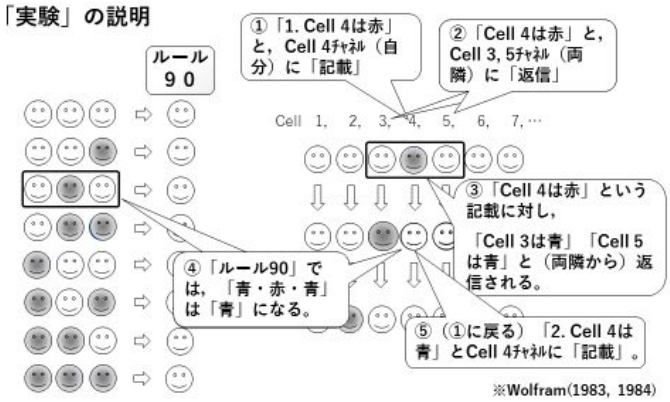

図２ １次元セル･オートマトンの「体験」説明用スライド

（出口, 2022）

(2) 「『規範』について考えるための授業」に関する実践的研究

これまでの研究成果を基にして，主として大学生を対象とした対面式の授業（出口，2019）およびオンライン授業（出口，2022）による「規範」について考える指導案を作成した。後者の指導案は 90 分× ３回で構成されたものである。授業では，自らの「行動基準」を測定して先行研究と比較したり，様々な行動基準を持った個人間の相互作用によって集団全体に規範逸脱行動が広がっていく過程に関する理論的なモデルを説明したりした。さらに，Microsoft の Teams を利用して，履修者にシミュレーションの「セル」の役割を担当させ，個々の「セル」が互いの相互作用を基に状態変容していく過程を疑似体験する活動も設定した（図２）。これは，本研究で扱われたシミュレーションの基になった研究(Wolfram，1983，1984)に関する基礎的な知識を，体験を通して学べるようにすることを目的としたものである。このように，心理学やその関連分野に関する多様な研究知見を通して「規範」について考えられるように工夫した。

受講者を対象とした WEB 調査によって，本授業の効果を実証的に検討したところ，「自分も周囲も（規範を）遵守している状況」（前述の「決定行列」における M11 の値）への満足度が増加する傾向が示された。また，授業後には「逸脱」という行動基準を持った生徒の割合が減ったものの，「同調」の割合は増加した傾向も見られた。すなわち，当該授業は「規範を逸脱する傾向」を持った者の割合を低下させうる一方で，周囲の行動（規範を「遵守」する行動だけではなく「逸脱」する行動も含む）に「同調」する傾向がある者を増加させる可能性が示され，その効果には限界がある可能性も示唆された。

(3) 「教員間いじめ」に関する調査

中学生や大学生だけではなく成人（社会人）に関する知見も得るために，教員による他の教員への「いじめ」，すなわち「教員間いじめ」についての調査を実施した。具体的には，「教員間いじめ」の被経験頻度や「『いじめ』を目撃した際の報告頻度」などの実態について，小中高等学校教員を対象とした３年間に渡る WEB 調査によって測定･分析した（出口，2020b，2020c，2021a）。

その結果，「身体を叩かれたり蹴られたりした」という「いじめ」の経験率は，2020 年度で 9.63% と少なくない値であることが示された（出口，2021a）。また，調査を実施した年度に第３者として「教員間いじめ」を目撃した者（回答者の約３分の１）のうち，これを他の教員等に報告した経験のある者は約４分の３程度，校長等の管理職に報告した者は約３分の２程度であった（出口，2020c）。このように，「教員間いじめ」の状況は深刻なものである可能性が示唆された。

(4) まとめ

上記のように，コンピュータ・シミュレーション等を用いた理論的な側面に焦点を当てた研究と，理論的な研究によって得られた知見を基にした教育実践的な研究の双方を実施した。これらの研究から，教育場面における規範逸脱行動拡散を考察するための理論的な枠組み（方法論的な側面を含む）の基盤が構築された。以上の研究結果は，査読付きの学術雑誌等で発表した。このように，理論的・実践的側面双方における研究成果が得られた。

＜謝辞＞

本報告書の英文要約は，Editage（www.editage.com)による校正サポートを受けた。

＜引用文献＞

安藤きよみ・中島 望・鄭 英祚・中嶋和夫（2013）．小学校学級担任の学級運営等に関連するストレス・コーピングに関する研究 川崎医療福祉学会誌，22，148-157.

Axelrod, R. (1997). *The Complexity of Cooperation*. Princeton University Press. （アクセルロッド，R. 寺野隆雄(監訳)(2003)．対立と協調の科学：エージェント・ベース・モデ

ルによる複雑系の解明 ダイヤモンド社)
Burt, S. A., Klump, K. L., Kashy, D. A., Gorman-Smith, D., & Neiderhiser, J. M. (2015). Neighborhood as a predictor of non-aggressive, but not aggressive, antisocial behaviors in adulthood. *Psychological Medicine, 45*, 2897-2907.
Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology, 58*, 1015-1026.
Deguchi, T. (2014). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review, 32*, 439-452.
出口拓彦 (2018). 教室における私語の頻度と規範意識・行動基準の関連：個人レベルおよび集団レベルの影響に着目して 実験社会心理学研究, 57, 93-104.
出口拓彦 (2019). 「規範逸脱行動について考える授業案」の作成：「授業中の私語」の伝播過程に着目して 次世代教員養成センター研究紀要, 5, 49-59.
出口拓彦 (2020a). 個人の態度が社会における行動の採用率に及ぼす影響：ローカルとグローバルな相互作用に着目して シミュレーション&ゲーミング, 30, 37-44.
出口拓彦 (2020b). 「教員間いじめ」を目撃した場合における報告頻度の規定因：「いじめ」を受けた教員は他者の「いじめ」を報告するのか？ 日本社会心理学会第 61 回大会発表論文集.
出口拓彦 (2020c). 教員間「いじめ」を受けた頻度と対人関係の関連 日本教育心理学会第 62 回総会発表論文集.
出口拓彦 (2021a). 「教員間いじめ」の経験頻度に関する年度間比較：2019 年度と 2020 年度の WEB 調査による検討 日本教育心理学会第 63 回総会.
出口拓彦 (2021b). ローカルな相互作用による限界質量モデルを用いた教室における規範逸脱行動拡散過程の分析：実際の座席位置を反映した授業における私語のシミュレーション 奈良教育大学紀要（人文・社会科学）, 70, 13-23.
出口拓彦 (2022). オンライン授業による「規範逸脱行動を考える指導案」の効果：1 次元セル・オートマトンを体験して「学級における人々の行動」を知る 次世代教員養成センター研究紀要, 8, 167-172.
出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連：大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, 21, 160-169.
Durmuscelebi, M., (2010). Investigating students misbehavior in classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education, 130*, 377-383.
Kelly, H. H., Holmes, J. H., Kerr, N. L., Reis, H. T., Rusbupt, C. E, & Van Lange, P. A. M. (2003). *An atlas of Interpersonal Situations*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
北折光隆 (2006). 授業中の私語に関する研究：悪質性評価の観点から 金城学院大学論集（人文科学編）, 3, 1-8.
Latané, B., Nowak, A., & Liu, J.H. (1994). Measuring emergent social phenomena: dynamism, polarization, and clustering as order parameters of social systems. *Behavioral Science, 39*, 1-24.
生天目 章 (2004). 相互作用科学シリーズ ゲーム理論と進化ダイナミクス：人間関係に潜む複雑系 森北出版
Özben, Ş. (2010). Teachers' strategies to cope with student misbehavior. *Procedia Social and Behavioral Sciences, 2*, 587-594.
Schelling, T. C. (2006). *Micromotives and Macrobehavior (with a New Preface and the Novel Lecture)*. New York: W.W. Norton & Co.
Stewart, E. A. (2003). School social bonds, school climate, and school misbehavior: A mul-tilevel analysis. *Justice Quarterly, 20*, 575-604.
鈴木 恵・戸塚智美・澤田和美・椎野雅代 (2015). 看護学生の私語の頻度と規範意識・社会的スキル・属性との関連：看護短期大学 2 年次後期終了後の検討 応用心理学研究, 41, 56-64.
高木英至 (2005). 限界質量モデルの反応曲線の推測 埼玉大学紀要（教養学部）, 41(2), 65-72.
高木英至 (2006). 限界質量の計算モデル 埼玉大学紀要（教養学部）, 42(2), 55-62.
Thibaut, J. W., & Kelley, H., H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. New York: Wiley.
卜部敬康・佐々木 薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究：リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, 47, 283-292.
Wolfram, S. (1983). Statistical mechanic of cellular automata. *Review of Modern Physics, 55*, 601-644. (Retrieved on Wolfram, S. (1994). *Cellular Automata and Complexity: Collected Papers by Stephen Wolfram*. Westview Press.)
Wolfram, S. (1984). Universality and complexity in cellular automata. *Physica D, 10*, 1-35.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 出口拓彦	４．巻 70
２．論文標題 ローカルな相互作用による限界質量モデルを用いた 教室における規範逸脱行動拡散過程の分析：実際の座席位置を反映した授業における私語のシミュレーション	５．発行年 2021年
３．雑誌名 奈良教育大学研究紀要（人文・社会科学）	６．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013495	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 出口拓彦	４．巻 8
２．論文標題 オンライン授業による「規範逸脱行動を考える指導案」の効果：１次元セル・オートマトンを体験して「学級における人々の行動」を知る	５．発行年 2022年
３．雑誌名 次世代教員養成センター研究紀要	６．最初と最後の頁 167-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013540	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 出口拓彦	４．巻 4
２．論文標題 授業中の私語への教師による対応と生徒の反応：中学校および高等学校教師に対するWEB調査	５．発行年 2021年
３．雑誌名 次世代教員養成センター研究紀要	６．最初と最後の頁 117-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013441	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 出口拓彦	４．巻 68
２．論文標題 1次元セル・オートマトン法による規範逸脱行動のシミュレーション：空間的収束に着目した2次元セル・オートマトン法との比較検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 奈良教育大学紀要（人文・社会科学）	６．最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013278	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 出口拓彦	4．巻 6
2．論文標題 「教員による私語」に対する教員自身の態度と「児童の私語」への対応の効果：自らの私語を否定的に捉えない教員が児童の私語を抑制することは可能か？	5．発行年 2020年
3．雑誌名 次世代教員養成センター研究紀要	6．最初と最後の頁 149-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 出口拓彦	4．巻 -
2．論文標題 個人の態度が社会における行動の採用率に及ぼす影響：ローカルとグローバルな相互作用に着目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 シミュレーション＆ゲーミング	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 出口拓彦	4．巻 5
2．論文標題 「規範逸脱行動について考える授業案」の作成：「授業中の私語」の伝播過程に着目して	5．発行年 2019年
3．雑誌名 次世代教員養成センター研究紀要	6．最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 出口拓彦
2．発表標題 「教員間いじめ」の経験頻度に関する年度間比較：2019年度と2020年度のWEB調査による検討
3．学会等名 日本教育心理学会第63回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 教員間「いじめ」を受けた頻度と対人関係の関連
３．学会等名 日本教育心理学会第62回総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 「教員間いじめ」を目撃した場合における報告頻度の規定因：「いじめ」を受けた教員は他者の「いじめ」を報告するのか？
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 生徒は他者の決定行列を正確に推測できるのか？
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 授業における児童の規範逸脱行動への教員による対応の効果：教員の規範逸脱行動に対する態度に着目して
３．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第66回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 ローカルな相互作用による限界質量モデルの妥当性検討：教室における実際の位置関係を反映させたシミュレーション
３．学会等名 日本社会心理学会第60回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 授業中の私語への複数教員による対応に関する態度：自分自身による対応への生徒の反応に着目して
３．学会等名 日本社会心理学会第59回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 ローカルな相互作用による限界質量モデル
３．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 出口拓彦
２．発表標題 授業中の私語への教師の対応と生徒の反応との関連
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

１．「不思議な私語とうさぎの寝言：２日間の集中講義」 （著者：出口拓彦，公開年：2021年） http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~deguchi/lc_u0000.htm 規範逸脱行動の１つと考えられる「授業中の私語」を題材として，心理学やその関連分野に関する研究で得られた知見（本科研費による研究を複数含む）を紹介した。具体的には，教室に私語が広がる過程について，セル・オートマトン法によるシミュレーションを基にして，比較的平易に説明した（読者は大学生以上を想定して執筆した）。また，「授業中の私語」に関する研究と物理学や数学，道徳などとの関わりについても触れるようにした。 ２．「教員間いじめ」に関する調査報告：教員社会は子どもたちよりも「いじめ」が多いのか？（オンライン連続セミナー いじめ対策における教師の役割と志） （講演者：出口拓彦，講演日2022年2月20日） オンライン連続セミナー「いじめ対策における教師の役割と志」（科研費基盤研究C（課題番号：19K02686，研究代表者：金綱知征）によるもの）の第２回セミナーに招待され，講演を担当した。2020年および2021年の学会で著者（出口）が発表した研究を基にして，我が国における「教師間いじめ」の実態や理論的な側面について解説した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関